

「外郎売り」の本文

拙者親方と申すは、お立合の中に、御存じのお方もござりましようが、お江戸を發つてにじゅうりかみがた、相州小田原一色町をお過ぎなされて、青物町を登りへおいでなさるれば、二十里上方、欄干橋虎屋藤衛門只今は剃髮致して、円齊となのります。

元朝より大晦日まで、お手に入れます此の薬は、昔ちんの国の唐人、外郎という人、わが朝へ来り、帝へ参内の折から、この薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ、冠のすき間より取り出だす。

依つてその名を帝より、とうちんこうと賜わる。

即ち文字には「頂き、透く、香い」とかいて「とうちんこう」と申す。

只今はこの薬、殊の外世上に弘まり、方々に似看板を出だし、イヤ、小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと色々に申せども、平仮名をもって「ういろう」と記せしは親方円齊ばかり。

もしやお立合の内に、熱海か塔の沢へ湯治にお出でなさるか、又は伊勢御参宮の折からは、必ず門違いなされますな。

お登りならば右の方、お下りなされば左側、八方が八つ棟、表が三つ棟玉堂造り、破風

には菊に桐のとうの御紋を御赦免あつて、系図正しき薬でござる。

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、ご存知ない方には、正身の胡椒の丸香、

白河夜船、さらば一粒食べかけて、その気見合いをお目にかけますよう。

先ずこの薬をかよつに一粒舌の上のせまして、腹内へ納めると、イヤどうも云え

ぬは、胃心、肺、肝がすこやかになりて、薫風咽より来り、口中微涼を生ずるが如し。

魚鳥、茸、麵類の食合わせ、その他、万病速効ある事神の如し。

さて、この薬、第一の奇妙には、舌のまわることが、銭コマがはだして逃げる。

ひょっと舌がまわり出すと、矢も盾もたまらぬじや。

そりやそりや、そらそりや、まわってきたわ、まわってくるわ。

アワヤ咽、さたらな舌に、カ牙サ歯音、ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、あか

さたなはまやらわ、おこそこのほもよろを、一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ、盆まめ、

盆米、盆こぼつ、摘蓼、摘豆、つみ山椒、書写山の社僧正、粉米のなまがみ、粉米のな

まがみ、こん粉米の小生がみ、繻子ひじゆす、繻子、繻珍、親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親か

へい子かへい、子かへい親かへい、ふる栗の木の古切口。

あまがつば 番合羽か、番合羽か、貴様のきやはんも皮脚絆、我等がきやはんも皮脚絆、しっかわ袴の
しっぽころびを、三針はりながにちよつと縫つて、ぬつてちよつとぶんだせ、かわら撫子、
野石竹。

のら如来、のら如来、三のら如来に六のら如来。

一寸先のお小仏におけつまずきやるな、細溝にどじよによるり。

京のなま鱧奈良なま学鯉、ちよつと四、五貫目、お茶立ちよ、茶立ちよ、ちよつと立ち

よ茶立ちよ、青竹茶筌でお茶ちよつと立ちや。

来るわ来るわ何が来る、高野の山のおこけら小僧。狸百匹、箸百膳、天目百杯、

棒八百本。

武具、馬具、ぶべ、ぶべ、三ぶべ、三ぶべ、合わせて武具、馬具、六ぶべ、べ。

菊、栗、きく、くり、三菊栗、合わせて菊、栗、六菊栗。

麦、しのみ、むぎ、しのみ、三むぎ、しのみ、合わせてむぎ、しのみ、六むぎ、しのみ。

あの長押の長雑刀は、誰が長雑刀ぞ。

向この胡麻がらは、荏のこまがらか、真こまがらか、あれこそほんの真胡麻殻。

がらびい、がらびい風車、おきやがれこぼし、おきやがれ小法師、ゆんべもこぼして又こぼした。

たあぶほぼ、たあぶほぼ、ちりから、ちりから、つつたっほ、たっほたっほ一丁だこ、落

ちたら煮て食お、煮ても焼いても食われぬものは、五徳、鉄球、かな熊童子に、石熊、石持、

虎熊、虎きす、中にも、東寺の羅生門には、茨木童子がうで栗五合つかんでおむしやる、

かの頼光のひざもと去らず。

鮎、きんかん、椎茸、定めて後段な、そば切り、そうめん、うどんか、愚鈍な小新発地。

小棚の、小下の、小桶に、こ味噌が、こ有るぞ、小杓子、こ持って、こすくって、こよこ

せ、おっと合点だ、心得たんぼの川崎、神奈川、程ヶ谷、戸塚は、走って行けば、やいと

を摺りむく、三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がしや、小磯の宿を七つ起きして、早天早々、

相州小田原とうちん香、隠れぬらぬめ賤群衆の花のお江戸の花ういろう、あれあの花を見

てお心をあやわらませよといつ。

産子、這子に至るまで、この外郎の御評判、こ存知ないと申されまいつぶり、角出せ、

棒出せ、ぼほほほほまゆへ、臼、杵、すりばち、ほほほほほまゆへ、まゆへ、まゆへ、まゆへ、まゆへ、羽目を張て

て今日お出でのいずれも様に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、息せい引つぱり、

東方世界の薬の元々、薬師如来も照覧あれと、ホホ敬って、ういろうは、いらっしやり
ませぬか。